



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	1. 多文化交流活動に必要なコミュニケーション能力を育成する ための日本語スタンダードの開発
Author(s)	小河原, 義朗
Citation	北海道大学国際教育研究センター紀要, 20, 5-16
Issue Date	2016-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/65688
Type	departmental bulletin paper
File Information	toku _JISCHU20_1.pdf



1. 多文化交流活動に必要なコミュニケーション能力を育成するための日本語スタンダードの開発

小河原 義 朗

1. 背景と目的

本学国際連携機構国際教育研究センター日本語・国際教育研究部門では、以下の2つをミッションとしている。

- (1) 留学生に対する日本語・日本文化教育
- (2) 留学生と日本人学生の共修教育（多文化交流科目）

及び上記にかかる研究開発

このミッションのもと、留学生と日本人学生がともに学び、様々な社会的な問題の解決に向けた新たな手段・文化を継続的かつ具体的に生み出していけるような、より豊かな社会構築のための即戦力となる人材養成を行っている。そのために、2013年度から留学生と日本人学生が協働してともに日本語で学ぶ問題解決型・プロジェクト型授業「多文化交流科目」を創設し、「一般日本語コース」の最上級科目として位置づけた。日本人学生は全学教育科目・一般教育演習（フレッシュマンセミナー）として、一方、留学生は本学に在籍する外国人留学生・研究員・教員を対象として本センターが提供する「一般日本語コース」の最上級科目として「多文化交流科目」を履修することにより、一定数の留学生と日本人学生が一つの教室で授業に参加するという状況を実現した。

「多文化交流科目」は、留学生にとっては日本語科目に位置づけられているものの、日本語そのものの能力の向上を目的としていない。図1のように、留学生と日本人学生が協働して課題解決を行うプロセスを通して①「課題を認識する」、②「ともに考える」、③「解決に向け実行する」の大きく3つのスキルの育成を目指している。それに伴い、「読む」「聞く」「書く」「話す」の4技能に「漢字語彙」と「文法」を加えた6科目で構成されていた従来の日本語コース・カリキュラムの改編に取り組んだ。そして、留学生と日本人学生が協働して行う多文化交流活動を支える「ことば」「コミュニケーション」を育成する日本語教育を提供するために、新たな枠組みによる能力記述を行い、日本語スタンダードの開発を試みた。本稿では、このスタンダード開発の経緯とその特徴について述べる。

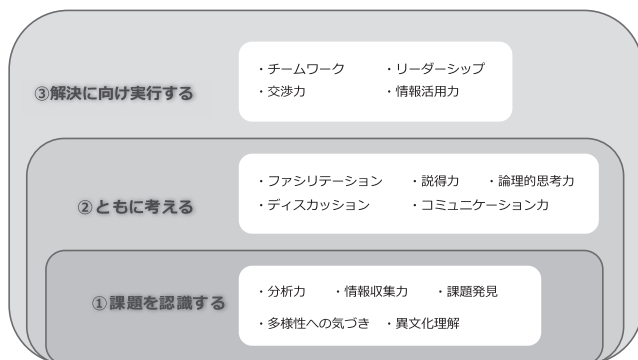


図1 多文化交流科目で育成を目指すスキル

2. 日本語コース・カリキュラムの改編

コミュニケーション能力の記述を行う枠組みとしては、CEFR (Common European Framework of Reference for Languages)、J F スタンダード (国際交流基金)、J L C 日本語スタンダード (東京外国語大学) などの先行事例を踏まえつつ、国際文化フォーラムの「外国語学習のめやす」(2013) を参考にした。これまでの本センターの日本語教育では、言語文化の知識理解である「わかる」を目標にした授業が主に行われていた。しかし、今回の改編では、それを技能として「できる」につなげるだけでなく、それらをもとにして他者と協働して新たな社会を創るために社会的な関係性を構築するという意味での「つながる」力をあわせ持つようなスタンダードの構築を目指していた。その意味で、「外国語学習のめやす」は、言語教育の目標として21世紀のグローバル社会を生き抜く資質・能力を獲得する、言語を使ってつながりを作り、他者と協働して社会を創造していくことを目指していることから、方向性が合致していた。

まず、コミュニケーション能力の記述には従来の「読む」「聞く」「書く」「話す」「漢字語彙」「文法」の6科目を見直し、人と人が対面で行う双方向のコミュニケーションを「やりとり」、「聞く・読む・見る」の解釈的コミュニケーションを「理解」、「話す・書く」の提示的コミュニケーションを「表現」として、以下の表1のように3つのモードを新たに設定した。

レベルは、最上級のレベルに多文化交流科目を据え、その下に従来の日本語コースのレベルに合わせて上級1レベル、中級3レベル、初級4レベル

表1 3つのモード

① やりとりモード	「話す・聞く」 「読む・書く」	日常会話をする、面接を受ける チャットをする、メール・LINE交換をするなど
② 理解モード	「聞く」 「読む」「見る」	講義を聞く、駅の構内放送を聞く 本・論文を読む、書類に目を通す、 テレビ・インターネットサイトを見るなど
③ 表現モード	「話す」 「書く」	プレゼンテーションをする、カラオケで歌う レポートを書く、ブログ・ポスター・動画を作るなど

ルの8レベルを設定している。上級は多文化交流科目とはほぼ同じレベルで、多文化交流科目で必要とされる各スキルの弱い部分を、学習者が自ら選択してトレーニングできるようにトピック、またはスキル別に設定されている。また、初級レベルで目指すのはいわゆる市販の初級日本語教材修了レベルであり、本センター初級日本語クラスでは『みんなの日本語1・2』を使用している。この初級と上級の間に中級の3レベルを設定している。今回のコース・カリキュラムの改編を図に示したものが図2である。なお、多文化交流科目は2013年度当初は最上級レベルとして開設したが、学習者がレベルを問わず自由に履修できるように、現在は初・中級日本語

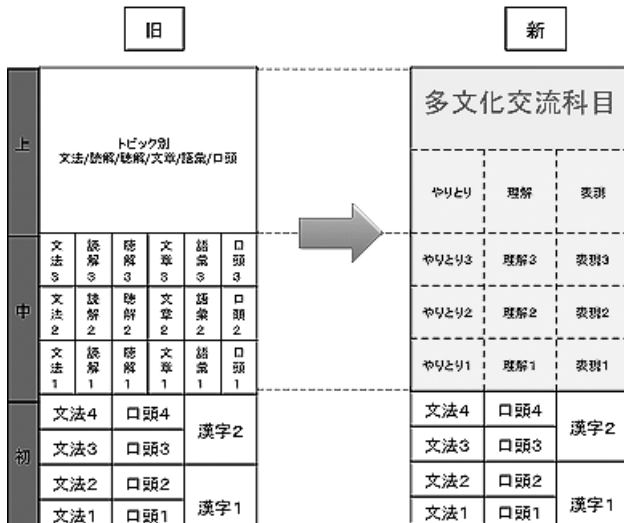


図2 日本語コース・カリキュラムの改編

レベルの多文化交流科目の整備を行っている。

3. 「北海道大学日本語スタンダードズ」の構築

スタンダードズの枠組みが決定したところで、次に日本語コースの最上級レベルに位置つけた多文化交流科目の各クラス（2014年度開講8科目）でどのようなスキルの獲得が目指されているのかを記述し、モード別に抽出・整理した。例えば、あるクラスから「内容を客観的に理解し、身近な事柄に引きつけて考えることができる」というスキルが抽出され、「理解」モードに分類した。同様に各クラスから抽出された記述を3モードにそれぞれ分類し整理したものが表2である。

表2 多文化交流科目で目指すモード別スキルの記述

	やりとり	理 解	表 現
多 文 化 交 流 科 目	➤自分の意見を論理的に伝え、相手を説得することができる。 ➤小グループで理解を共有し、各自の意見を出し合い、まとめることができる。 ➤ファシリテーターとしての役割を果たすことができる。 ➤専門家の解説に対して適切に反応、質問することができる。 ➤目的と場面にあわせて適切な文面でメールを書くことができる。	➤学術的な内容を詳細に理解することができる。 ➤内容を客観的に理解し、身近な事柄に引きつけて考えることができる。 ➤目的に応じて必要な情報を適切な方法で検索・収集することができる。 ➤得られた情報を適切に整理、精査し、固有のテーマや課題を見出すことができる。 ➤収集した情報・データを適切な方法で集計・分析し、目的に応じて活用することができる。	➤理解した内容と自分の意見を、わかりやすく簡略にまとめて発表することができる。 ➤調べた内容と自分の意見を、説得力ある文章にまとめることができる。 ➤見学した内容について道筋を立てて論理的に文章化することができる。 ➤目的に合った調査方法を検討し、実施することができる。 ➤実際の活動の計画を組み立て、明示化した上で実践することができる。

そして、表2の多文化交流科目で育成を目指すスキルを達成するために、モードごとに上級から初級までのレベル別に必要な日本語能力を記述したものが表3のレベル別言語行動目標である。

続いて表3のようにレベル別に記述された言語行動目標と、現行の各レベルの具体的な授業内容を結び付け、従来の6科目から3モードへとスムーズに移行させる必要がある。そこで、まず既存の中・上級の各クラス

表3 レベル別言語行動目標

レベル	やりとり	理解	表現
上	相容れない話題や場面において、平等に意見を共有しつつ、もっとも効果的な方法で議論し合って相互理解を導くことで、共通の目的の達成に寄与することができる。	目的に応じて情報を集め、高度な内容を詳細に理解し、分析、活用することができる。	TPOを配慮した適切な語句を選択し、説得力のある表現技法を用いて効果的に記述・表現できる。
中 3	自分が言いたいことを様々な表現を効果的に使って流暢かつ自然に表現することができる。相手に対して柔軟に効果的に対応することができる。	トピックに関係なく、長くて複雑な内容を詳細に理解することができる。	複雑な話題について、論理的に明瞭かつ詳細に記述・表現することができる。
中 2	より幅広い話題について、正確に言葉を使うことができ、その場にふさわしい丁寧さで、お互いにストレスを感じることなく、対話や関係を維持しながら自然にやりとりができる。	適切なリソースを使い、様々な目的や内容の種類に合わせて読み方・聞き方を変えながら、ポイントを理解することができる。	様々な話題について、関連する情報を活用しながら、明確かつ詳細に記述・表現することができる。
中 1	日常的な話題だけでなく、非日常的で抽象的な話題についても、自分の意見を表明したり、情報を交換したり、話し合いをすることができる。	簡潔な事実関係の内容を、十分に理解することができる。	より広い範囲の事柄について、ある程度まとまった内容を、正確で適切な語句や文を使って記述・表現することができる。
初 4	自分が想定していない状況においても、学んだ語句や文を使って、相手の協力を得られれば、自分の意見を表明したり、情報を交換したりできる。	短い簡単な内容を理解することができる。	自分の身の周りや関心のある事柄について、ある程度まとまった内容を、趣旨が通じる程度に表現することができる。
初 3	自分が想定している範囲で、学んだ語句や文から選択して、相手の協力を得られればやりとりができる。	よく耳にしたり目にしたりする語句や文を理解することができる。	自分にとって身近な事柄を、短い語句や文を並べて表現することができる。
初 2 / 1	自分が想定している範囲で、基本的な言い回しを使って、相手の協力を得られれば簡単なやりとりができる。	よく耳にしたり目にしたりする語句や文のうち、ごく基本的なものを理解することができる。	自分にとって身近な事柄について、短い語句や文で表現することができる。

において目標としている能力とそのための具体的な活動内容を各担当教員に記述してもらった。例えば中級２レベルであれば、文法クラスから「類似表現を使い分けができる」、文章表現クラスから「推量・判断・主張などを含めて自分の考えを述べる」、読解クラスから「３～６段落程度の文章を読み、段落ごと、あるいは全体として理解した内容を他者に説明する」、口頭表現クラスから「決められた時間に応じたスピーチをする」、漢字語彙クラスから「発表・レポート・論文などで使う語彙と使わない語彙の使い分けがわかる」などである。それらを新たに設定した３モード、各レベルに合わせて整理し直し、「スキル（各モード・レベルの「言語行動目標」を可能にするために身に付ける必要がある言語行動をより具体的に記述したもの）」、「アウトカム（さらにそれらが実際にクラスで達成されたことを示す、より具体的な授業活動を意識して記述したもの）」に分けて記述した。具体的には表４のようになる。これは旧中級２レベルの各旧科目の活動内容の記述を新しい中級２表現モードの言語行動目標にもとづいて整理し、スキルとアウトカムに分けて記述した例である。

表４ 「表現」モード中級２レベルの作成過程

新レベル	モード	言語行動目標	スキル	アウトカム	旧レベル	旧科目	活動内容の記述
中2	表現	様々な話題について、関連する情報を活用しながら、明確かつ詳細に記述・表現することができる。	(1)様々な話題についてより適切な表現を使って述べることをできる。 (2)より適切に文章を組み立て、明確に意見を述べることをできる。 (3)わかりやすくスピーチやプレゼンテーションをすることができる。 (3)決められた時間や量に応じてスピーチやプレゼンテーションをしたり、文章や視聴した内容を要約して表現することができる。	(1)類似表現を使い分けたり、表やグラフなどのデータを用いるための表現を使って、共通点と相違点、物事の変化などの事実について客観的に述べることをできる。 (2)引用やデータをを用いて意見を述べたり、推量・判断・主張などの自分の考えについて根拠をもって述べることをできる。 (3)決められた時間や量に応じてスピーチやプレゼンテーションをしたり、文章や視聴した内容を要約して表現することができる。	中級2	文法	似ている表現(たとえば、と・ば・たら・なら、みたい・らしいなど)を上手に使い分けことができる
					中級2	文章表現	推量・判断・主張などを含めた自分の考えを述べる
					中級2	文章表現	引用をして、それについての同意・反論を書く
					中級2	文章表現	データの解釈をして、それについて(の自分の)意見を書く
					中級2	読解	3～6段落程度の文章を読み、段落ごと、あるいは全体として理解した内容を他者に説明することができる。
					中級2	読解	文章内で具体的に描写されていない状況を文脈から推測し、その内容とそうように考えた理由を他者に説明することができる
					中級2	口頭表現	決められた時間に応じたスピーチをすることができる
					中級2	漢字語彙	発表・レポート・論文などで使う語彙と使わない語彙の使い分けがわかる
					中級2	漢字語彙	適切な語と共起させることができる。

上記の結果を「やりとり」「理解」「表現」のモード別一覧表として示したものが表５－１～３である。なお、初級は目的、対象、期間等の異なるコースが複数並行して行われていることから、モード別にせず、従来の「文法」「口頭表現」「漢字語彙」の３科目のままで表３の言語行動目標に基づいて行っている。

表5－1 「やりとり」モード

レベル	スキ ル	ア ウ ト カ ム
上級	(1)複合的に絡み合ったり相互の主観がぶつかり合う状況を回避することなく、積極的に対応することができる。 (2)立場の違いによる主張を交渉、説得、調整しながら、ファシリテーターとしての役割を果たすことができる。 (3)他人の意見やコメントに柔軟に反応し、的確な質問・コメントを行うことで、全体の円滑な進行に役立てることができる。	(1)政治姿勢や差別などの諸社会問題、また利害が相反する場面などで、各自の意見を必要十分な程度で出し合い、まとめることができる。 (2)感じの良い話し方を用いて、使用する文脈とその効果を十分に理解した上で言葉を駆使し、やりとりを促進、活性化することができる。 (3)相手の意見に上手に反論・訂正でき、さらに相手の反応に応じて自分の話し方を適切に変えながら、関係改善に向けてやりとりを操作することができる。
中級3	(1)複雑で高度な話題について、互いの情報や意見を有効に活用してやりとりすることができる。 (2)話しにくい事柄についても、相手の気分を害することなく、適切な表現を使って述べるができる。 (3)微妙なニュアンスに隠された言外の意味を理解し、正しく反応することができる。	(1)経済、政治、法律、科学など、様々な話題について、互いの情報を交換したり、意見を調整したりしながら、話をうまくまとめることができる。 (2)垣根表現（ほかし）や言いさし表現、敬語などを的確かつ効果的に利用し、違和感なく話を続けることができる。 (3)相手の遠回し表現などから社会的習慣を読み取り、ふさわしい度合いでことばを返すことができる。
中級2	(1)様々なジャンルの話題について、内容の度合いを調整しながらやりとりすることができる。 (2)場面の改まり度にあった述べ方ができる。 (3)相手の反応にあわせて述べ方を変えることができる。	(1)自分の関心事について相手の興味を誘って述べることができ、相手の関心事について質問などを交えながら適切に反応することができる。 (2)フォーマルな場面で、簡単な前置きや定型表現などを添えることができる。 (3)相手の反応を見ながら、適切なフィラーや相づちなどを入れたり、必要な情報を追加したりして対応することができる。
中級1	(1)身近な話題について、知っていることや自分の考えを簡単に述べたり、相手に発言を求めたりすることができる。 (2)相手に自分の意図を正確に伝えることができる。 (3)相手の話に正しく反応することができる。	(1)自分の専攻、母国の文化・社会について短く説明したり、相手にも同じようなことを質問したりすることができる。 (2)話の目的と背景（事実関係）が正しく伝わるように、正確な接続詞と表現を使って述べるができ、相手に正しく理解されなかったときは、話の内容を修正することができる。 (3)相手にわかりやすく、適切な形で聞き返したり同調したりすることができる。

表5-2 「理解」モード

レベル	スキ ル	ア ウ ト カ ム
上 級	(1)専門的学術的な内容を理解し、自分の言葉・文脈で説明することができる。 (2)適切な方法で必要な情報を検索・収集することができる。 (3)情報を適切に整理、精査することができる。	(1)専門的学術的な講義や解説などを聞いたり、論文や学術書、記事などを読んで詳細に理解し、内容についてわかりやすく説明することができる。 (2)目的に応じて必要な情報をさまざまなリソースの中から適切な方法を取捨選択し、検索・収集することができる。 (3)収集したさまざまな情報やデータを集計してまとめ、結論を導いたり、比較したり、批判的に分析して課題やテーマを見つけたりすることができる。
中 級 3	(1)より広いジャンルの長くて複雑な発話や会話、文章を理解することができる。 (2)複数のストラテジーを適切に使って理解することができる。 (3)詳細に内容を理解することができる。	(1)ニュース・講義・ドキュメンタリーなどを視聴したり、複雑で情報が不十分な会話を聞いたり、長い意見文・論説文、広告、チラシ、パンフレット、情報誌、雑誌、新聞記事などを読んだりして理解することができる。 (2)序論・本論・結論などの構成や表・グラフなどのデータを踏まえる、スキミングやスキニングなどのストラテジーを目的に応じて適切に組み合わせたり選択したりして読んだり聞いたりすることができる。 (3)ポイントだけでなく、話し手や書き手の構成や意図に沿って全体を詳細に理解することができる。
中 級 2	(1)様々なジャンルのまとまった発話や会話、文章を理解することができる。 (2)目的や内容に応じて様々な聞き方や読み方を使うことができる。 (3)内容のポイントを確実に理解することができる。	(1)3、4段落の独話による説明文やまとまった会話を聞いたり、説明文や物語文、エッセイを読んだりして、理解することができる。 (2)図表の情報やキーワード、表現、人間関係、場面、文脈などを捉えて予測や推測をしながら読んだり聞いたりすることができる。 (3)話し手・書き手が伝えたいこと、その意図や論点、気持ちを確実に理解することができる。
中 級 1	(1)ある程度まとまった発話や会話、文章を理解することができる。 (2)使われている文法や語彙、表現にもとづいてボトムアップで理解することができる。 (3)短文や話し言葉の特徴がある発話を正確に理解することができる。	(1)2、3段落の独話による説明文やあるトピックについての会話を聞いたり、2、3段落の説明文や簡単なエッセイを読んだりして、内容を理解することができる。 (2)文章構造、時間的表現、指示語、文末表現などを意識しながら、聞いたり読んだりすることができる。 (3)音声変化や音調などの話し言葉の特徴がある発話や、初級の既習項目からなる短文を聞いたり読んだりして、早く正確に理解することができる。

表5－3 「表現」モード

レベル	ス キ ル	ア ウ ト カ ム
上級	(1)場面にふさわしい表現・読み手あるいは聞き手にとってわかりやすい表現について考慮し、表現を使い分けができる。 (2)図や表を適切に引用し、質・量ともに適切な関連情報を用い、明確な構成を以て提示し、記述・表現できる。 (3)扱うトピックについての関連情報を適宜加え、根拠に基づいて論理的かつ詳細に記述・表現できる。	(1)類似表現についての使用例を知り、場面にふさわしい使い分けができる。漢語と和語のバランスについて自ら吟味できる。 (2)発表する内容や場、聞き手についてじゅうぶん配慮し、時系列／包含／対立等々の構成を検討したうえで、文章を書いたり、わかりやすい表現を検討したうえで表現したりできる。 (3)レジュメやスライドを使い、キーワード等を頼りに聴衆に働きかけながら、明確な構造を持った長めの発表ができ、説得力のある発表ができる。
中級3	(1)複雑な話題についてより高度な表現を使って述べるができる。 (2)論理的に意見を述べたり、段落を用いて論理的な文章を書くことができる。 (3)説得力のあるプレゼンテーションができる。	(1)名詞化、連用中止法、適切な接続詞、仮定や否定等の内容に応じたニュアンスを加えた表現を用いることができる。 (2)序論・本論・結論等の構成で、簡単なレポートを書いたり、根拠のある意見を述べ、ディスカッションができる。 (3)有効な媒体を適切に使って、自分の専門などについて10分程度のプレゼンテーションをすることができる。
中級2	(1)様々な話題についてより適切な表現を使って述べるができる。 (2)より適切に文章を組み立て、明確に意見を述べるができる。 (3)わかりやすくスピーチやプレゼンテーションをすることができる。	(1)類似表現を使い分けたり、表やグラフなどのデータを用いるための表現を使って、共通点と相違点、物事の変化などの事実について客観的に述べるができる。 (2)引用やデータを用いて意見を述べたり、推量、判断、主張などの自分の考えについて根拠をもって述べるができる。 (3)決められた時間や量に応じてスピーチやプレゼンテーションをしたり、文章や視聴した内容を要約して表現することができる。
中級1	(1)アカデミックな場面で必要な表現を使うことができる。 (2)適切に文章を組み立て、記述・表現することができる。 (3)意見を述べたり、まとめた内容を発表することができる。	(1)書き言葉と話し言葉の違いを理解し、指示詞や理由、目的、結果、比較、定義の表現などを用いることができる。 (2)接続詞を用いて文章を組み立てたり、句読点や文章の構成を理解して、段落を用いて文章を展開することができる。 (3)2、3分の発表をすることができる。

以上のようにスタンダーズとして記述した結果、表6のようにモードごとのレベルを分ける基準が明確になると同時に、能力記述の記載基準も明

確になり、「モード」と「レベル」の関係が整理された。記載基準の(1)～(3)は、表5－1～3の「スキル」「アウトカム」欄の(1)～(3)にそれぞれ対応している。

表6 レベルの基準と記載基準

モード	レベルの分類基準	(1)～(3)の記載基準
やりとり	・ 日常的な話題から抽象的な話題へ ・ 大まかな説明から細かい説明へ ・ 命題重視から待遇重視へ ・ 短い表出・理解から長い表出・理解へ ・ 既習内容の活用から応用へ	(1)内容の幅と深さ (2)働きかけ (3)反応
理解	・ 短いものから長いものへ ・ 事実説明から幅広く専門的なジャンルへ ・ 単独のストラテジーから複雑かつ複数のストラテジー使用へ ・ 大まかな理解から速く正確な理解へ ・ 既習内容の確実な理解から応用へ	(1)対象となる内容 (2)ストラテジー (3)解釈レベルの程度
表現	・ レポートを書くためのパーツから段落のある論理的な構造のある文章へ ・ 正確でより複雑な表現へ ・ データや引用を用いたより客観的で論理的なものへ ・ 短いものから長いプレゼンへ	(1)使われる表現 (2)組み立て能力 (3)プレゼン技法

この「北海道大学日本語スタンダード」は、2015年度から中級、2016年度から上級の各クラスで使用しているが、学期末には、多文化交流科目を支える中・上級4レベルの言語行動目標の達成のために、各クラスがスタンダードをもとにどのような教室活動を行っているかについて実際の教材などを持ち寄って担当教員間で話し合い、共有する場を設けている。その結果、抽象的な能力記述から具体的な活動例が浮かび上がり、モードごとに各レベルのクラスでそれぞれどのような教室活動を行うとスタンダードに示された「アウトカム」のどの部分が実際に達成できるのか、各教員で具体的にイメージすることが可能となった。

4. まとめ

「北海道大学日本語スタンダード」の特徴は、いわゆる一般的な言語コミュニケーションの手段ではなく、留学生と日本人学生が協働して学ぶ場

で必要となる課題遂行能力の育成に貢献する「ことば」「コミュニケーション」を目標にしている点である。そして、そのために従来の知識理解としての「わかる」や、実際に運用する技能としての「できる」だけではなく、それらを使って他者と協働するために新たな社会的な関係性を構築する「つながる」力を重視しているという点が挙げられる。

現在、本センターではこのスタンダードを使って実際にコースを展開し、3年目を迎えるが、課題も多い。まず、各モード・レベルの記述の妥当性と整合性の検証が必要である。そして、スタンダードにもとづいて、各クラスで具体的にどのような授業活動をするべきなのか、テーマ、内容・方法、教材・素材等の具体例をあわせて示していく必要がある。そのために、現在も前述のように実践の結果を各担当教員で持ち寄り、レベル・モード間の連携を取りながら継続して改善に取り組んでいる。また、多文化交流科目についても4年目を迎え、コース・カリキュラムについてカリキュラムマネジメント（松尾、2015など）等の観点から、評価、改善を図っていく予定である。

本スタンダードの印刷版は、『北海道大学日本語スタンダード2016年度版』として本センターHPからダウンロード可能である

(http://www.isc.hokudai.ac.jp/www_ISC/cms/cgi-bin/index.pl?page=files&view_file=2410_1)。

参考文献：

- 国際交流基金（2010）『J F 日本語教育スタンダード2010』第三版
国際文化フォーラム（2013）『外国語学習のめやす』
東京外国語大学（2011）『J L C 日本語スタンダード2011改訂版』
東京外国語大学留学生日本語教育センター（2011）『世界的基準となる日本語スタンダードの構築 報告書』
西口光一（2013）『留学生大量受け入れ時代に向けた大学における新たな日本語教育スタンダードの構築』平成21年度－平成24年度 科学研究費基盤研究（B）研究成果報告書
北海道大学国際本部留学生センター（2015）『留学生と日本人学生がともに学ぶ「多文化交流科目」を考える』国際本部留学生センターブックレット1
松尾知明（2015）『21世紀型スキルとは何か』明石書店

Council of Europe (2001) *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment*. Cambridge: Cambridge University Press. (吉島茂他訳・編 (2004) 『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』 朝日出版社)

おがわら よしろう (国際教育研究センター准教授)